

禅の友

—Zen no Tomo—

3

March 2022





ご本山だより
大本山永平寺【竹簀運び】

大本山永平寺
☎〇七七六・六三・三二〇二



厳しい冬を乗り越えた三月の永平寺は、先月の中旬から今月末まで引き続き新たな修行僧の入門の時期を迎えており、希望と不安を胸に抱き緊張の面

持ちの雲水が、順次に山門の前へ到着致します。それぞれが到着を知らせる木版を打ち鳴らし、上山の許しを乞い、仏殿を仰ぎ五体投地のお拝を行います。

「これから仏の家に自らを投げ入れ、放下箸してすべてをお任せします」という覚悟を示し、いよいよ修行道場

での生活を始めるのです。一方、伽藍の様子に目を向けますと、昨年十一月の雪囲い作務で設置され降雪から建物

を守っていた竹簀が、今月に入り雲水全員による作務によって全て取り外され、境内の景色も冬から春の装いへと

変わります。雪と囲いによって閉ざされていた伽藍に清涼な春風が吹き込み、さっぱりと見渡しの良くなった眺めの

中に、まるで何か束縛から解き放たれたかのような悦びが満ち満ちているのを感じます。

「おやみなく、雪はふりけり 谷の戸に 春来にけりと 驚ぞなく」

道元禅師さまはこのような和歌を残されており、時期を過ぎていつまでも雪が降り続くのを見ておりますと、ついにはこのまま春が来ないのではないかと不安に捉われてしまうことがあります。しかしながら「時節因縁」という言葉がありますように、私たちの身の回りの出来事は刻々と変化し、また時節が到来します。すべてが仏さまの姿の表れであるのだからそこに身を任せ、雪が降り続くなら冬だと思い、そして鶯の啼き声を聞けば春だと思ふ。真新しい心でその時々を受入れ、またその時々を逃さずに行じていく。春開く竹簀運び、永平寺の季春の風景です。

4



ご本山だより 大本山總持寺

【道は山の如く、登れば益す高し。
徳は海の如し、入れば益す深し。
『伝光録』第十祖 協尊者章】

大本山總持寺

☎〇四五・五八一・六〇二二



春の息吹が感じられるようになってこの頃、總持寺では新しい修行僧が上山してきています。

これまで学生や社会人として様々な生活スタイルを過ごしてきた彼らではありますが、ひとたび本山に入つたなら全く今までとは違った衣食住となります。

僧堂そうどうに起居して和合の精神で一心に修行に励むのです。

それ故、個人的な勝手な言動は慎まなければなりません。

これを「大衆一如だいしゆいちによ」と言います。

標題の瑩山けいざん禪師ぜんじさまのお示しは私たち仏道修行者に対してその歩むべき道は山のように登ってみると益益高く、仏祖のお徳は接してみれば益益

深いものであり、それは終着点のない仏道修行への厳しさをお示しされたものなのです。

さて、三月十一日は今年十一年目を迎える忘れまじ東日本大震災であります。

本山には三宝殿さんぼうでん近くの高台に宗教学者・山折哲雄氏命名の「平成の救世観音かんおん」があります。

この観音さまは遥か数百キロ先の被災地を向かれ震災犠牲者の慰霊と復興を願って祈り続けておられるのです。

そして大祖堂だいそどうでは石附禪師せんとくさま大導師にて被災物故者慰霊法要を厳肅にお勤め致します。

選・坊城俊樹

剪定が終り現る陶狸

愛知県 松井 暁見

評 剪定というといつの季節にもありそうだが、俳句では二月ごろに枝を刈り日当たりを良くすることを言う。新しい芽吹きを促す春の心が満ちる。ひよっこりと現れた狸の置物。なんともユーモアがあるのは狸だったからだろう。陶狸にもある待春の心。

温泉に浸り殺気流しぬ獵師宿

秋田県 小田嶋 恭葉

評 獵師は山脈を巡り獲物を仕留めてきた。宿に戻ると身に纏っている様々な獣臭などを洗い落とす。詳しくは知らないが、それは獵師の日常の掟のようなものかも知れぬ。そしてそれはまた本人の殺気とともに獲物の魂を慰撫するという意味もあるかも知れない。

◆ 新年の日めぐり重く壁に掛け 神奈川県 吉田 明彦

◆ 傷つきし牡蠣をもらひて煮詰めけり 岩手県 阿部 熙子

◆ 川一筋たたみ込んだる吹雪かな 岩手県 鈴木 道昭

◆ 玉風に凍る逆さの垂水滝 石川県 千間 宏治

◆ 冬の雨横顔美し濡れ仏 三重県 荻屋 奈良美

◆ 手招きの母に駈け寄る冬帽子 埼玉県 野原 孝子

◆ 冴ゆる夜や煌めきわたるLED 大阪府 口本 美智子

◆ あか汲むや専女がけさの秋あはせ 千葉県 野中 修次

◆ 太陽の匂ひ集めて落葉籠 山口県 御江 恭子

◆ この雨が雪になるよな鉛空 福井県 廣瀬 しのぶ

選者吟

外套の乱歩めきたる好々爺 俊樹

作句小見 季題の「外套」と書くとなんとなく時代めく。しかしオーバーコートでは乱歩のイメージが出てこない。その怪しさかと思いきや、良く見るといかにも好々爺が召されていた。場所は浅草の浅草寺の境内。浅草にはこんな人がごまんと居られる。

選・長澤 ちづ

柏手を打ちて乗り込む初漁舟妻が手渡す
手拭い白し

鳥取県 徳本 義則

評 新年を迎えて、初めて漁に出る船の一年間の無事と大漁を祈る気持ちが余すところなく詠われている。厳肅さのなかの清々しさを伝えるのが、結句の「手拭い白し」である。三句目「初漁船」は「はついさりぶね」と読みたい。

現^{うつつ}が即過去となるとう友の言おもいつつ
汲む若水の音

兵庫県 前田 あつ子

評 高齢になるに連れて時間の経過を早く感じるようになるが、昨日が過去となるレベルではなく、この瞬間瞬間そのものが過去という友とその言葉を反芻する作者。哲学や宗教のような問題提起ながら、実感を伴う一首である。

◆ 精霊が見ているような心地して一大注連縄寺院に渡す

三重県 西村 廣視

◆ 亡き父母の福島弁はやさしかり雪降る真夜の夢に顛ちきさて

福島県 大槻 弘

◆ カ込めて打つ鎮魂の鐘の音は枯木連なる寺山に消ゆ

岩手県 阿部 照子

◆ 街路樹の枝ごとく払はれて冬のかまへに瘤かたく立つ

北海道 菅原 三江水

◆ あやまつてばかりなのよとスーパ―に長く勤むる妹の言ふ

山口県 濱田 道子

◆ 宇宙の生成の謎不可思議よ神がなさるとは答にならず

ロサンゼルス 井上 健一

◆ 吊るさるる大根風と日に馴染み峡の並び屋夕暮早し

鳥取県 眞山 博充

◆ 間違へた編目までを解くやうに間違へた日から違り直せたら

秋田県 小松 紀子

◆ 飛び来たる番の目白は花市の椿の蜜を吸ひて消えたり

広島県 徳永 進一郎

◆ 夜勤の子を送り出して一段落日は宮柱の木末にかかれり

茨城県 田口 昭子

選者誌

おとがいを肘掛け椅子の肘にのせここは僕ん家

主張する犬

ちづ

作歌小見 遣り直しの効かない一回限りの人生だから一瞬一瞬が切なく愛おしいものですが、小松さんが詠うように編目を解いて編み直せたらどんなに良いでしょう。身近な比喩が効果的。今年こそはコロナ禍が終息することをお祈りします。